

二次元意味論にもとづく

チャーマーズのフレーゲ的意味論について

仲宗根 勝仁

はじめに

チャーマーズが提唱する二次元意味論は、言葉の意味の認識的側面と形而上学的側面を捉える意味論である。彼はそのような意味論を構成するために、「シナリオ(scenario)」と呼ばれる認識的可能性の記述、シナリオから外延への関数とみなされる認識的内包(epistemic intension)、反事実的可能性から外延への関数とみなされる仮定法的内包(subjunctive intension)という三つの概念を用いている。本稿の目的は、チャーマーズが 2002 年の論文「意義と内包について」において行った二次元意味論をフレーゲ的枠組みに応用した意味論を、クリプキによる記述群理論批判を手掛かりに考察することである。そこでまず第 1 節では、チャーマーズの二次元意味論を、認識価値の問題(あるいは認知的意義の問題)とフレーゲ的意義とを関連付けつつ、フレーゲ的意味論として粗描する。第 2 節では、『名指しと必然性』におけるクリプキの記述群理論批判(様相的議論(modal argument)と認識的議論(epistemic argument))を確認し、それがフレーゲ的意味論一般にも影響力があるということを説明し、第 3 節ではクリプキの批判に対するチャーマーズの応答を見る。第 4 節では、チャーマーズの見解とクリプキの見解を、特に固有名の意味論の観点から比較し、最後にチャーマーズの意味論の展望について私なりの見解を述べる。

1. チャーマーズのフレーゲ的意味論

チャーマーズの二次元意味論において重要な役割を果たすのは、前述したよ

うに、シナリオと二種類の内包である。本節ではまず、それらについて本稿に必要な程度の説明をし、それからその意味論がいかなる意味でフレーゲの意味論と呼べるのかということを説明する。

1. 1. シナリオ， 認識的内包， 仮定法的内包

チャーマーズの言うシナリオ，すなわち認識的可能性は、「私たちがアプリアリに知る限りでありうる世界のあり方」¹である。この記述だけではチャーマーズの考える認識的可能性がどのような可能性なのか分かりにくいので、フィオッコによる説明を参考に考えてみる。フィオッコは、認識的可能性(あるいは思惟可能性)を主体相対的な可能性(一般に言われるような認識的可能性)として考えるか概念的的可能性として考えるかによって、認識的可能性の意味が異なることを指摘している²。前者の意味での可能性は主体の知識や信念に相対的に形成される可能性であり、おおよそ次のように説明される。

ある命題 p が、ある主体 S に相対的に、認識的に可能であるのは、 p が S の知っていることと整合的なときである。³(強調は引用者)

チャーマーズの言う認識的可能性すなわちシナリオはこの意味での認識的可能性ではない。むしろ、主体の知識や信念に左右されず、シナリオの記述に含まれる語が表す諸概念が整合的である限りで可能な事態、すなわち概念的的可能性に近い⁴。もちろん、チャーマーズがシナリオを認識的可能性と見なすことには理由があるのだが⁵、シナリオに関する問題を扱うことは本稿の目的ではない。ここでは本稿の約定として、シナリオ＝概念的的可能性に類似の認識的可能性とする。

それでは、いかにしてある文についてのシナリオの存在を確認することができるのか、言い換えると、ある文 S が認識的に可能であるということをどのように知ることができるのか。チャーマーズによれば、 S が認識的に可能なのは、「 S でないということがアプリアリには知りえない時」である⁶。「水は H_2O でない」を例に考えてみる。私たちはその言明の否定をアプリアリに知ることができ

きない、すなわち「水は H_2O である」ということをアプリアリに知ることができない。したがってその言明は認識的に可能である、あるいはその言明を真にするシナリオが存在する。水がある複雑な化学的構造 XYZ を持つといういわゆる双子地球の例がその言明を真にするシナリオの一例であろう。

続いて認識的内包について。認識的内包とは、前述したように、シナリオから外延への関数である⁷。より詳しく言うと、ある表現の外延がどのシナリオが現実だと判明するか依存するその仕方を捉える内包である⁸。このように定義される認識的内包を私たちが評価するには、例えばある文 S について、「もしシナリオ W が現実なら、S であるか」という問いを考えればよい。「ヘスペラスはフォスフォラスである」の認識的内包を例にとる。その言明はもちろん私たちの世界で真である。しかしその言明の否定「ヘスペラスはフォスフォラスでない」はアプリアリではなく、よってその否定言明を真にするシナリオが存在する。そしてもしそうなら、そのシナリオが現実であるということを想定することによって、すなわち日没後の西の空に一際輝く星が明け方の東の空に一際輝く星とは異なる対象であるシナリオが現実とみなされるなら、「ヘスペラスはフォスフォラスである」は偽であろう、と考えることができるのである。したがって「ヘスペラスはフォスフォラスである」の認識的内包は外延として偽をとることがある。

仮定法的内包について。仮定法的内包は反事実的可能性から外延への関数、すなわち、クリプキの言う「可能世界」という言葉で理解しているような世界から外延への関数である⁹。このような内包の評価は次のようになされる。まずある特定のシナリオが現実とみなされ、認識的内包がその前提となるシナリオによって外延を選び出したと仮定する。次に、現実とみなされるシナリオとは異なる反事実的状况を想定し、そのような反事実的状况においてある言語表現の仮定法的内包がどの外延を選び出すか考えるのである。このような認識的内包と仮定法的内包の「二次元的」関係が二次元意味論たる所以である¹⁰。それでは、仮定法的内包の評価の仕方を、先の言明「ヘスペラスはフォスフォラスである」を例に説明する。日没後の西の空に一際輝く星が明け方の東の空に一際輝く星と同じ対象であるシナリオにおいて、「ヘスペラス」の仮定法的内包と「フォスフォラス」のそれは、そのシナリオに相対的なすべての反事実的状况において同

じ対象を選び出す。つまり、この場合、「ヘスペラスはフォスフォラスである」は偽ではありえない。他方、日没後の西の空に一際輝く星が明け方の東の空に一際輝く星とは異なる対象であるシナリオを前提とするなら、「ヘスペラス」の仮定法的内包と「フォスフォラス」のそれは、そのシナリオに相対的なすべての反事実的状况で異なる対象を選び出す。したがってこの場合、「ヘスペラスはフォスフォラスである」は真ではありえない¹¹。そして私たちの世界は前者のシナリオであるため、「ヘスペラスはフォスフォラスである」は必然的真理である。

このように考えると、アポステリオリな真理とは、少なくとも一つの、現実とは一致しないシナリオでは偽であるような真理であり、必然的真理は、すべての反事実的状况で真である真理と考えられそうである。すなわち、「ヘスペラスはフォスフォラスである」や「水は H_2O である」がアポステリオリな必然的真理であることを二次元意味論によって表現できそうである。本稿ではこのことについて踏み込んだ考察はしない。ここでは、本稿の議論で問題となる認識的内包について次のテーゼを定めておく。

ある単称名 A と B について、「 $A = B$ 」がアプリオリなのは、A の認識的内包と B の認識的内包がすべてのシナリオにおいて同じ対象を選び出すときかつそのときに限る。¹²

1. 2. 二次元意味論のフレーゲ的枠組みへの応用

チャーマーズは 1.1.節で説明した二次元意味論をフレーゲ的枠組みへと応用する。その方法は、認識的内包がフレーゲ的意義に類似した働きをすることを明らかにし、フレーゲの言う意義と指示との関係を、認識的内包と外延との関係として構成する、というものである。フレーゲによれば、意義とは「指示対象の与えられる仕方」であり¹³、そのように特徴づけられる意義が果たすべき役割は、チャーマーズの考えではおそらく、(1)ある言語表現の指示対象を決定すること、(2)認識価値の問題に一定の回答を与えることの二つである。そしてチャーマーズの意味論においてこの二つの役割を果たすのが認識的内包なのである。それでは、二つの役割をいかにして果たすのかを以下で見えていくことにす

る。

(1)について。チャーメーズによれば、認識的内包とはシナリオから外延への関数であった。これはすなわち、シナリオが与えられることによって認識的内包はその外延を決定するということである。そのような外延決定の際にチャーメーズが想定しているのは、表現の外延を同定するための暗黙の規準(*tacit criteria*)である¹⁴。すなわち、ある言語表現を理解するという時に私たちが把握するのは、暗黙の規準としての認識的内包である。そのような規準は明示的に定義される必要がない、すなわち、認識的内包は記述で表す必要がない。多くの場合、固有名などの記述的には表されない言語表現がもつ認識的内包と、その表現を記述的に表した言語表現の認識的内包とは外延が異なるからである¹⁵。例えば、「知識」と「正当化された真なる信念」とはおそらくかなりの程度外延を同じくするが、それにも関わらずゲティアの反例のような例が存在する。よって「知識」を「正当化された真なる信念」によって定義することはできないし、他のより複雑な記述によっても定義できないかもしれない。しかしそのことによって知識に何らかの規準が存在することが否定されるわけではない。

(2)について。認識価値の問題とは、端的に言うくと、ふたつの単称名「a」と「b」について、「 $a = a$ 」とは異なり、「 $a = b$ 」が情報付与的な言明であるのはなぜか、という問題である。もし「a」と「b」とを単に同じ指示対象を持つ異なる字面でしかないとみなすのであれば、例えばヘスペラスはフォスフォラスであるということが天文学的な探究の結果得られた真理であるということを説明できない。この問題に対してフレーゲが提案したのが、単称名の意義である。例えば、「ヘスペラス」と「フォスフォラス」とはその指示対象は同じ(金星)だがその意義(対象の把握の仕方)が異なるために「 $a = b$ 」はトリヴィアルでない、認識的に価値のある主張たりうるのである。チャーメーズはこのような単称名の認識的側面を、認識的内包の相違によって説明する。詳細は省くが、彼はおおよそ次のテーゼを保持するだろう。

ある「a」と「b」とが異なる認識的内包を持つとき、「 $a = b$ 」が真であるということは認識的に価値がある。

再び「ヘスペラスはフォスフォラスである」を例に説明する。「ヘスペラス」と「フォスフォラス」とが異なる認識的内包を持つとは、何らかのシナリオにおいてはそれらが異なる外延を選び出すということである。すなわち、「ヘスペラスはフォスフォラスである」は、どのシナリオが現実であるかが分からなければ真偽が分からない。そしてどのシナリオが現実であるのかを知るには、天文学的探究などの経験的情報が必要である。ゆえに「ヘスペラスはフォスフォラスである」は、世界についての実質的な情報によってその真理が判明する、認識価値のある言明である。

このように、チャーマーズの認識的内包は非記述的なフレーゲ的意義に類似した役割を果たすと考えることができそうである。そこで問題となるのが、チャーマーズのこのようなフレーゲの意味論が、フレーゲの意味論への従来からなされている批判に答えることができるかどうかである。以下では、クリプキによる記述群理論批判を取り上げ、それがどのようにフレーゲの意味論に関わるのか、そしてチャーマーズがいかにして応答するのか見ていく。

2. クリップキの議論—様相と認識

『名指しと必然性』におけるクリプキの批判は主に、クリプキが固有名の「標準理論」と見做した、固有名は何らかの記述(群)と同義であるとする意味論、すなわち記述群理論に向けられている。その代表的擁護者はサールなのだが、クリプキの批判はサールだけでなく、フレーゲやラッセル、ストローソン、クワイン、ウィトゲンシュタインなどにも向けられている。以下では、クリプキによる記述群理論批判の二つの柱、「様相的議論」と「認識的議論」について説明し、クリプキがそのような批判を行う意図を明確にする。

2. 1. 様相的議論¹⁶

様相的議論は、端的に言うと、固有名は固定指示子であり、記述群は非固定指示子であるため、固有名と記述群は同義ではない、というものである¹⁷。

例えば「夏目漱石」という固有名について、標準理論によれば、「日本の小説

家」や「イギリスに留学経験がある者」, 「『坊ちゃん』という小説を書いた者」などの記述を選言で結んだ一連の記述群を φ とすると, 「夏目漱石」と φ とは同義だ, ということになる. そして, 標準理論によれば, ある固有名(「夏目漱石」)を理解しているとは, 一群の記述群 φ の大部分がその固有名に結び付けられるということを知っているということである¹⁸. さて, 標準理論による「夏目漱石」のこの分析は正しいだろうか. クリプキの考えに即すなら, これは正しくない. というのも, 夏目漱石は小説家にはならず, イギリスに留学もせず, その他実際に彼が成したであろうすべてのことを彼が成さなかったような反事実的状況が考えられるからである. そのような反事実的状況において, 「夏目漱石」は相変わらず夏目漱石その人を指示するが, 記述群 φ は夏目漱石その人を指示できず, 夏目漱石と似たような業績を残した別の人物が存在すればその人物を選び出すのである. したがって, 「夏目漱石」は, 現実に夏目漱石その人を指示するのであれば, すべての反事実的状況で夏目漱石その人を指示する固定指示子であり, それに対して φ は現実には夏目漱石を指示するとしても, 反事実的状況の記述の仕方によってはその指示対象を変えうる非固定指示子である. これが正しいなら, 反事実的状況で異なる振る舞いをする二つの言語表現の意味が同じであるはずがない, と考えられるのである.

2. 2. 認識的議論

認識的議論は, 固有名とそれに関連する記述群とが, 反事実的状況ではなく, 現実にも異なる指示をするということを指摘し, 標準理論が誤っていることを示す議論である. この議論を明確にするために, 「(Nが存在すれば)NはDである」がアプリアリであるかどうか, ということ調べることにする¹⁹. ただしここでの「N」は固有名を表し, 「D」はNについての記述群を表す. また「Nが存在すれば」はここでの議論の前提であるため, 以降この但し書きは省くことにする.

標準理論によれば, 「NはDである」はある話し手にアプリアリに知られる²⁰. なぜ標準理論によるとそのように考えなければならないのか, ということについてクリプキは詳しく説明していないが²¹, おそらく, NとDが同一

視され(標準理論のテーゼ), また **D** が固有名の指示対象を決定する働きを担うのであれば, アプリオリでなければならないと考えているのであろう。夏目漱石の例を用いてこのことを説明する。「夏目漱石」がある記述群 φ と同義であるなら, φ は「夏目漱石」の分析である。すなわち, 「夏目漱石は φ である」は分析的真理である²²。また φ が「夏目漱石」の指示対象を決定するのであれば, それは夏目漱石その人(対象としての夏目漱石)を知らない状態で指示が可能でなければならない。したがって, φ が「夏目漱石」という固有名に結び付けられているということはアプリオリである。ここまでが標準理論から考えられる指示のあり方である。しかし明らかに, 「夏目漱石」という固有名が φ を持つことはアプリオリな事柄ではない。例えば, 歴史的・文献学的研究の結果, 夏目漱石に帰せられる業績のほとんどが実は他の何者かに帰せられるということが判明する, という事態はありうることである。もし標準理論が正しいなら, この場合, 「夏目漱石」に結び付けられる φ のうちの大部分の記述が真だと信じていた者たちは, 実は「夏目漱石」で夏目漱石ではない他の何者かを指示していたのだということになる。しかしこれはおかしな話である。私たちは φ のうちの大半が誤りであることが明らかになってもなお, 「夏目漱石」によって夏目漱石その人を指示していたと考えるだろう。すなわち, 「夏目漱石」と φ とは現実にも異なる指示を持ちうるのである。したがって一般に, 「**N** は **D** である」はアプリオリではない。

ここでクリプキの二つの議論がフレーゲの意味論にどのように関わるのかを簡潔に考察しておく。クリプキによる批判の矛先は, 固有名と記述とが同じ意味論的働きをすると見做すことに向けられている。そして同様の批判は, フレーゲの意味論一般にも当てはまりうる。ここで注目すべきは, 固有名の指示対象の同定の仕方を意味論的に説明することの是非である。フレーゲのように指示対象の把握の仕方としての意義を意味論に導入する道を選ぶと, クリプキの議論に晒されてしまうように思われる。というのも, クリプキが示していることは, 対象の同定の仕方としての固有名の意義は, 反事実的状況においても現実においても, 固有名が指示すべき対象とは異なる対象を選び出してしまふことがありうる, ということだからである。

3. チャーマーズによる応答

チャーマーズは、クリプキの議論が記述群理論(標準理論)への批判としては正当であり、またその議論が多くのフレーゲの見解にも影響力があることも認める²³。しかし彼は、その議論が彼の意味論にも当てはまるとは考えない。それどころか、彼の意味論はクリプキの議論を整合的に取り込むことができる、と考えている。以下では、いかなる意味で彼の意味論がクリプキの議論と整合的なのかを見ていく。

3. 1. 様相的議論への応答

クリプキの主張は、固有名とそれに関係する記述群とが同義だとすると、反事実的状况においてそれぞれ異なる対象を表してしまうから、それらは同義ではない、というものであった。しかしながらこの批判は少なくともチャーマーズのフレーゲの意味論には当てはまらない。というのも、第一に、1.1節で示唆したように、クリプキの固定指示子の概念を仮定法的内包によって捉えることができ、したがって固有名の仮定法的内包とそれに関係する記述の仮定法的内包とが反事実的状况に応じて異なる外延を選び出す、というクリプキの主張と類似の主張が可能だからであり、第二に、認識的内包(及びフレーゲ的意義)はむしろ、シナリオに応じて現実世界における表現の外延を決定するのであり²⁴、したがって様相的議論は直接の批判にはならないからである。したがって様相的議論は認識的内包に対して大きな問題を提起しない。

3. 2. 認識的議論への応答

チャーマーズの応答は、簡単に言うと次のようになる。クリプキの認識的議論は固有名に結び付けられる記述群が何らかの言語的表現として表わされねばならないということを前提しているのだが、そのような考えはチャーマーズのフレーゲ的意味論においては回避されている。

話者が名前に「結び付ける (associates with)」諸記述が指示を固定しないとクリプキが議論する時、彼は常に話者が名前に結び付ける言語的諸記述かあるいは少なくとも話者の明示的な記述的諸信念に訴える。しかし内包的枠組みは、諸記述が常に言語的諸表現に対応するという考えにコミットしない。…また内包的枠組みは、名前に結び付けられた諸内包が話者の明示的な信念に対応するという考えにさえコミットしない。²⁵

チャーマーズによれば、言語的表現としての記述はむしろそれ自身の認識的内包(あるいは意義)を持つ²⁶。またチャーマーズのフレーゲの意味論においては、認識的内包は非記述的なフレーゲ的意義なのであり、認識的内包を何らかの記述によって表現する必要さえない。ある言語表現を理解しているという時に示すべきことは、あるシナリオが与えられたらそれに応じてその言語表現の外延を決定できるという私たちの暗黙的な能力であって、言語表現の何かしらの内容を明示的に示すことではないからである。したがって、ある固有名とそれに結び付けられた言語的記述とが同じ認識的内包を持つかどうかということは別の実質的な問いであり、アプリアリに知ることができるかどうかは彼の意味論においても明らかではない²⁷。このことを夏目漱石とその記述群 ϕ とを用いて説明する。さて、「夏目漱石は ϕ である」はチャーマーズの意味論においてアプリアリだろうか。これがアプリアリな真理であると言うためには、夏目漱石の認識的内包と ϕ の認識的内包とがすべてのシナリオで同じ対象を選び出すことができなければならない。しかしながらそうではないシナリオは容易に作り出せそうである。そしてそのようなシナリオにおいて「夏目漱石は ϕ である」は偽である。したがって、チャーマーズの意味論においても「夏目漱石は ϕ である」はアプリアリではない。

4. 両者の見解の比較—固有名の観点から—

チャーマーズのフレーゲの意味論は多くの点でクリプキの議論と整合的なようにみえる。しかし両者の見解には齟齬がある。最後にそのことを明らかにし、今後の課題を抽出する。

両者の見解が大きく異なるのは、固有名の意味についてである。クリプキは、固有名はかなりの程度ミル的であると言い²⁸、したがって固有名の意味はその指示対象に尽きるという見解を擁護しているように思われる。しかしそれは、固有名にはいかなる仕方でも認知的側面を伴うことは無い、と言っているわけではない。実際、クリプキは「ヘスペラスはフォスフォラスである」という文は経験的問題を提起するし、「指示を固定する様式は表現された文に対してわれわれが取る認識上の態度に関わっている」と言っている²⁹。ただしそれは、認識的側面が固有名の意味の一部であるということには必ずしもならない。

したがって、経験的探究に先立ってある人が持つ証拠のもとでは、彼がある意味でまったく同じ状況、すなわち質的に同一の認識的状况に置かれて、二つの天体を「ヘスペラス」、「フォスフォラス」と呼び、しかもそれらは同一ではない、ということは疑いなくありうる。…しかしそれは、ヘスペラスがフォスフォラスでないことがどちらにも転びえた、ということではない。…[「ヘスペラス」と「フォスフォラス」という]これらの名前を今まさにわれわれが使うように使う限り、われわれとしては前もって、もしヘスペラスとフォスフォラスが同一物であるならばそれらはいかなる他の可能世界においても別物ではありえない、と言えるのである。³⁰ ([]内は引用者)

以上のことが示唆していることは次のようなことである。(1) 私たちの使う「ヘスペラス」や「フォスフォラス」の意味は特定の対象(金星)への指示のみである。しかし(2)「ヘスペラス」と「フォスフォラス」についての、私たちの世界との認識上の相違は全くないが指示する対象が異なる反事実的状况において、「ヘスペラス」と「フォスフォラス」とが異なる対象を指示するということが確かに考えられる。しかし(3)それら(の少なくともどちらか)は私たちの使う「ヘスペラス」や「フォスフォラス」ではない、すなわちそれらは字面こそ同じだが意味が全く異なる語である。

それに対してチャーマーズは、認識的側面を反映する認識的内包が固有名の意味にとって第一義的だとみなしているように思われる。すなわち、固有名の

認識的内包は外延を選び出すその仕方を表すのであって、それを満足する外延(あるいは対象)が何であるかは副次的な問題である。例えばチャーマーズは認識的内包を評価することについて次のように述べる。

これ[認識的内包の評価]は、関連する(relevant)認識的可能性が特定される時主体は正しい外延を現実決定する、ということ并要求せず、その外延が理性(reason)の把握の範囲内にあることを要求する。³¹ ([]内は引用者)

このように、チャーマーズは固有名の認識的側面を捉える認識的内包を重要視しており、認識的内包を選び出す対象は固有名の意味にとって本質的ではない。

この両者の見解の相違は、二つの通常の固有名³²を伴う同一性言明の分析において際立つ。「夏目漱石は夏目金之助である」という同一性言明について考えてみる。クリプキの見解を踏まえるなら、「夏目漱石」と「夏目金之助」とが私たちの使い方で使われる限りは、シナリオ、反事実的状况問わずいかなる可能な状況においても真なる言明である。それに対してチャーマーズは、その言明の否定がアプリアリではない、すなわち「夏目漱石は夏目金之助ではない」がアプリアリには否定できないために、それらが異なる対象を選び出すシナリオが存在する、と考えるだろう。しかしながら、「夏目漱石」と「夏目金之助」とがあるシナリオで異なる対象を選び出すという主張は簡単には受け入れられるものではないように思われる。というのも、「夏目漱石」と「夏目金之助」とが異なる対象を選び出すようなシナリオがあると考える者は、その二つの固有名のうち少なくともどちらかについて誤った理解をしていると(少なくとも直観的には)言えそうだからである。

おわりに

チャーマーズが試みる二次元意味論のフレーゲ的枠組みへの応用は、固有名のフレーゲ的意義の理論に新たな視点を提供している。またその意味論は、フレーゲ的意義を認識的内包として再定式化することの他に、クリプキの固定指

示子の概念を仮定法的内包によって説明できる表現力豊かな意味論でもある。しかしながら、チャーメーズの意味論が受け入れられるためには、クリプキ以降支配的な固有名のミルの説明にも勝る固有名の意味の説明が必要であろうし、そのような試みは未だ不徹底であるように思われる。したがって結局のところなすべきは、固有名の意味はその指示対象に尽きるという見解を退け、フレーゲの意義を導入することを正当化するという、従来からある言語哲学的問題なのである。

註

1. Chalmers (2002), p. 145.
2. Fiocco (2007), p. 387 を参照。また同様の区別をチャーメーズも行っており、前者を厳密な認識的可能性 (strict epistemic possibility), 後者を深い認識的可能性 (deep epistemic possibility) と呼ぶ。Chalmers (2011), p. 62 等を参照。
3. Fiocco (2007), p. 390.
4. *Ibid.* p. 393 を参照。
5. シナリオの詳細は、Chalmers (2002), (2004), (2006), (2011) などを参照。
6. Chalmers (2002), p. 146 を参照。
7. *Ibid.* p. 145 を参照。
8. *Ibid.* p. 145 を参照。
9. *Ibid.* p. 161 を参照。
10. *Ibid.* p. 163 を参照。
11. 仮定法的内包についての詳細は、*Ibid.* modal argument (第 7 節, pp. 157–168) を参照。
12. *Ibid.* pp. 150–151 を参照。
13. Frege (1892), S. 26 (邦訳 73 頁) を参照。
14. Chalmers (2002), p. 143 を参照。
15. *Ibid.* pp. 142–143.
16. 「様相的議論」及び「認識的議論」という名称は飯田 (1995) による。様相的議論について詳しくは Kripke (1980) の第一講義や第二講義の pp. 74–78 (邦訳 87–93 頁), 飯田 (1995), 273–282 頁を参照。
17. 飯田 (1995), 278 頁参照。
18. *Ibid.* 268 頁を参照。
19. これは Chalmers (2002), pp. 168–169 を参考にしている。
20. *Ibid.* p. 168, Kripke (1980), p. 71 (邦訳 84 頁) を参照。なお、クリプキは標準理論のテーゼ (5) として、「『もし X が存在すれば、X は ϕ のほとんどをもつ』という言明は、話し手によってアプリアリに知られている」(同上) と述べている。
21. クリプキは、本稿註 8 で引用したテーゼ (5) は、標準理論を構成する諸テーゼから導かれるものだとする。Kripke (1980), p. 73 (邦訳 86 頁) を参照。
22. 飯田 (1995), 273–275 頁及び飯田 (1995), 第 7 章, 註 25 (331–332 頁) を参考にした。
23. Chalmers (2002), p. 168 を参照。

- ²⁴. *Ibid.* p. 159 を参照.
²⁵. *Ibid.* p. 169.
²⁶. *Ibid.* p. 142 を参照.
²⁷. *Ibid.* p. 169 を参照.
²⁸. Kripke (1980), p. 20 (邦訳 22 頁) を参照.
²⁹. *Ibid.* pp. 20–21 (邦訳 22–23 頁).
³⁰. *Ibid.* pp. 103–104 (邦訳 124–125 頁).
³¹. Chalmers (2002), p. 148.
³². ここで「通常の」固有名としたのは、記述的固有名と区別するためである。

引用・参考文献

- Chalmers, D.J. (2002). “On Sense and Intension”, in *Philosophical Perspectives*, 16, pp. 135–182.
- (2004). “Epistemic Two-Dimensional Semantics”, in *Philosophical Studies*, 118, pp. 153–226.
- (2006). “The Foundation of Two-Dimensional Semantics”, in *Two-Dimensional Semantics*, Manuel Garcia-Carpintero and Josep Marcia (eds.), Oxford University Press, pp. 55–140.
- Fiocco, M.O. (2007). “Conceivability and Epistemic Possibility”, in *Erkenntnis*, 67, pp. 387–399.
- Frege, G. (1892). “Über Sinn und Bedeutung”, in: *Zeitschrift für Philosophie und philosophische Kritik*, NF 100, S. 25–50 (「意義と意味について」, 黒田旦, 野本和幸編, 1999 年, 『フレーゲ著作集 4 哲学論集』, 勁草書房, 71–102 頁所収).
- Kripke, S.A. (1980). *Naming and Necessity*, Basil Blackwell and Harvard University Press (八木沢敬, 野家啓一訳, 1985 年, 『名指しと必然性』, 勁草書房). 本稿における原文の引用・参照に用いたのは 1981 (pbk.), Blackwell Publishing. また初出は D. Davidson and G. Harman (eds.), 1972, *Semantics of Natural Language*, Reidel Publishing Company, pp. 253–355.
- 飯田 隆 (1995). 『言語哲学大全 III 意味と様相(下)』, 勁草書房.